



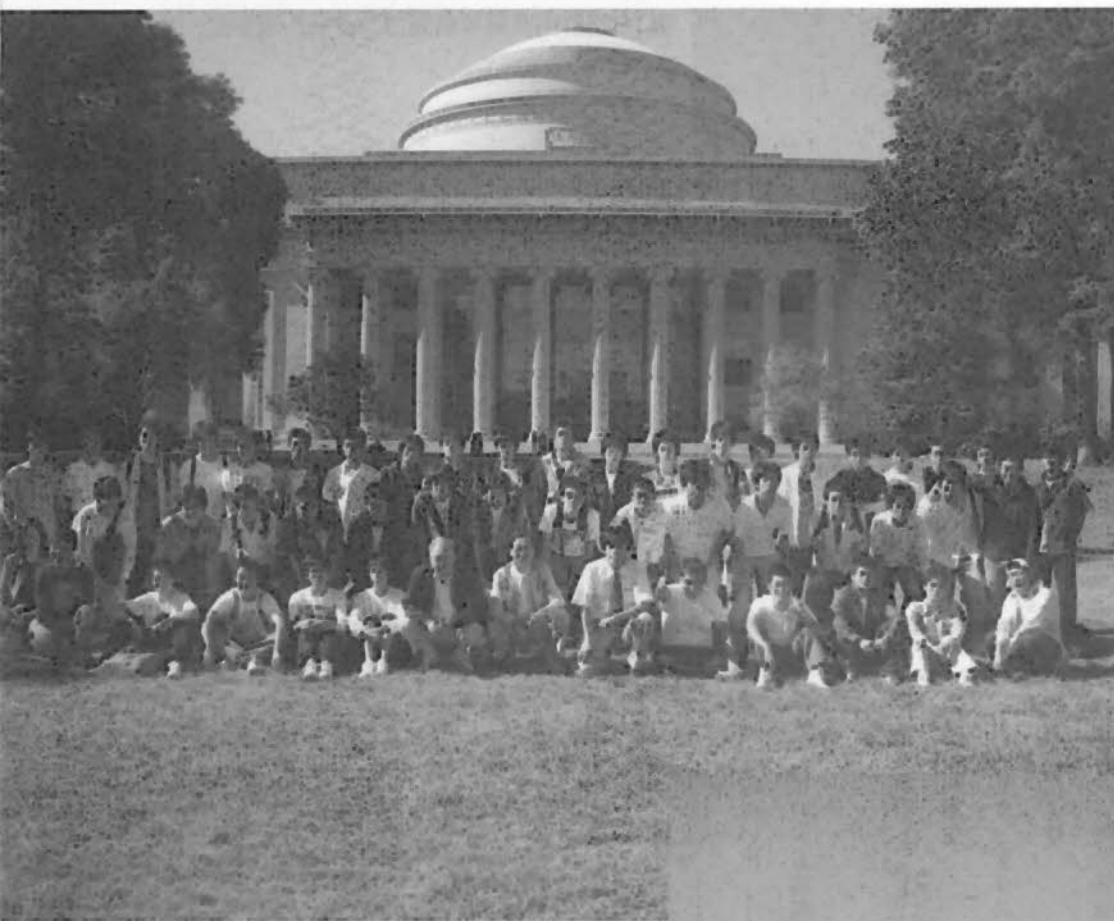
高崎高校同窓会報

2004

第38号

平成16年11月30日

特集／SSH NASA派遣事業報告





……
20



いあいさつ

同窓会会長 横田 英一

立冬をすぎ、肌寒さを感じる季節となつてまいりました。今年を振り返ってみますと、人間の力では如何ともしがたい自然の脅威を目の当たりにした、そんな一年になってしまいました。夏の猛暑、台風の相次ぐ上陸、浅間山の噴火、お隣の新潟県で、今なお頻発している地震など、人々の日常生活に実質的な被害を与えただけでなく、気持ちのうえにも暗い影を落とす災害が数多くありました。一日も早い復興を願うのは勿論のことですが、復興を支援する具体的な行動について、私たちは考える必要があります。前進することの大切さを思い出して、それぞれが何かしらの行動を起こしたいものです。

高崎高校同窓の諸兄におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。毎年のことながら、各界・各方面における諸兄のご活躍を見聞することが多いのですが、同窓会といたしましてもまことに心強く、ご同慶の至りであります。皆様のご活躍に見合ったものにするべく、また要望に真摯に応えられるよう、同窓会でもさらに充実した活動を展開してゆく所存です。

例年、この会報の紙上で私がお願い申し上げている維持会費の納入につきましても、ここ数年間

はとくに大勢の会員のご協力をいただいております。皆様の、同窓会に寄せる思いをひしと感じている次第であります。

さて、今年、本校二年生の八十二名が、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の活動の一環として、八月中旬から十日間余り、アメリカ航空宇宙局（NASA）に研修に出かけました。ジョンソンスペースセンターとケネディスペースセンターでは、土井隆雄宇宙飛行士やNASAの研究者の講演を拝聴し、充実した研修となったようです。NASA行きは、生徒たちが希望したものです。日本の高校生を受け入れたことのないNASAの扉を叩いたのが、進取と活発の気風に富んだ高々生だったという事実にはただただ感心するばかりです。

平成十七年度からは、SSHと双璧をなす「ヒューマンサイエンスクラス」の設置が予定されています。社会科学および人文科学分野に強い興味関心を抱き、さまざまな問題に対して、主体的に考えていくことのできる人材の育成を最大の目標に据えています。社会のさまざまな場面で必要とされるコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を備えた人材づくりも目指していく、と

伺っております。同窓会といたしましても、学校側からの要望に応えるかたちで、できる限りの協力をしていきたいと考えております。

「企業・研究所・大学訪問」や「社会人講師授業」なども含めて、将来の生き方や職業を見据えた実地的な研修がふえていることは、若い人たちにとって有意義なことと思われます。さまざまな研修を契機として、将来の自らのあるべき姿を探り、自らの職業を思い描くことは、当人を向上へと導くだけでなく、活動性に富んだ社会の気運の隆盛にもつながると考えるからです。ただ、そこで注意していただきたいのは、人生という主題ばかりを考えるのが、高校生の本義ではないということです。日々の地道な行い（学問）を抜きにし、実技や実務を軽んじてしまつては、真の進歩は望めません。ただ職業観を伝えるだけでなく、細部を丁寧に味わうのが学問の楽しさだということに気づかせながら、私たち同窓生が本校生徒のさまざまな取り組みにわずかでも力添えができれば、と考えております。

今後とも同窓諸兄の心強いご支援をよろしくお願い申し上げます。

（群馬トヨタ自動車（株） 代表取締役社長 50期）



いあいさつ

学校長 栗原 健

ここに、同窓会報第三十八号の発刊を心からお慶び申し上げます。

このたび、小林前校長の後任としてお世話になることとなりました。何卒宜しくお願い申し上げます。着任以来、「より高い、より強い、骨太の高校」として一途に進進していきたいという思いとともに、県内屈指の進学校、かつ文武両道を謳歌する伝統校において果たすべき責任の重さを痛感しているところであります。

同窓会の皆様には、平素から本校の充実・発展に物心両面にわたる多大のご支援・ご協力をいただいているところであり、お陰様を持ちまして本校の教育活動は全般にわたり順調に推移し、それぞれが着実に成果をあげております。このことに改めて深く感謝申し上げます。この言うまでもなく、母校に対する思いは、小・中学校あるいは高校又は大学とそれぞれ学んだ段階によって様々であり、異なるものですが、同窓生の皆様にお会いするたびに一様に共通した熱き思いを強く感じています。それは、高専で学んだ誇りであり、共有できる自信と心情でもあり、その後の人生に少なからぬ影響を及ぼしているに違いないと思われる点であります。こうした機会あることに同窓諸兄が熱く語る「紅燃ゆる健児」の心意気は、現在の生徒諸君や教職員への刺激

や激励として深く響いているものであります。

今日、規制緩和や教育特区の動き等に見られるように、各方面で教育改革が急速かつ大胆に進められており、いずれの学校も明確にその特色を打ち出し、独自性を発揮することが求められています。そうした中で、本校は雑誌「アエラ」(二〇〇四/五/十七)でも取り上げられたように、「公立王国」を堅持し進学実績を伸ばしている群馬県の一番手として高く評価されたところであり、今後ともこの地位は確固たるものにしていかなければなりません。これを支えるものは、学業と部活動の両輪で総合的な人間力を養い、将来のリーダーたり得る人材の基礎づくりを重点を置く本校の特色にあると考えます。社会人講師授業やボランティア学習、企業・研究所・大学訪問研修、文部科学省指定のスーパーサイエンス・ハイスクール事業等はその象徴的部分であり、その取り組みの成果には広く関心や期待が寄せられています。

今後とも、同窓会の皆様にご指導・ご支援をお願い申し上げ、あいさついたします。



医療費亡国論の正体

同窓会副会長 佐藤 和徳

「日本は医者と看護師が少ないため医療費が安く、医療事故多発の原因になっている」と申せば驚く方もいると思いますが、事実です。

高齢化社会、医学医療の進歩と高度化により、人手と設備が必要となり医療費が嵩むのが常識だからです。一九九九年OECDデータ人口千人当たり日本の医師数一・九人(平均二・八人)で、必要数三十八万人、実数二十六万人で十二万人の不足です。

百床当たりの医師、看護師は米国の六分の一しか居りません。

医療費を対GDP比で見ると米国二二・九%、独国一〇・五%、仏国九・八%、日本七・五%と世界十九位で、オリンピックなら予選敗退です。しかしWHOは日本の医療水準、医療制度が健康長寿国をもたらしたとして世界一と評価し、金メダルを授与しました。(米国三十七位)費用対効果を考えると他国の追随を許しません。

今の世の中でおかしい事は、大切な事がほとんど議論されずに、ほとんど決まってしまう事です。医療も同じです。誤った又は植えつけられた固定観念に支配されています。イメージです。

医療が大事にしているのは、患者の自然治療力の手助けをしてベストの医療をするのだ」という基本姿勢です。

日本の医療は「平等、公平」を旨として成立しています。

GDP五〇〇兆円、国家予算八十五兆円と財政投融資など合計三四〇兆円で国家財政が賄われています。

三〇兆円の国民医療費の公費負担(税金)は三分の一以下です。

日本の有形資産残高三、一一四兆円、個人保険金額一、四〇〇兆円、個人金融資産一、二〇〇兆円、公共事業費八十五兆円、公的年金四〇兆円で、医療費はパチンコ産業と同程度、葬式産業の二倍となっています。

又労働人口の九人に一人が医療福祉関係に就業している訳で本当に医療費は高いのでしょうか。

社会及び財政の構造改革が必要なのは理解できますが、手術は温存すべき臓器と切除すべき臓器を明確に区分して行います。SARS、AIDSの蔓延は規制撤廃、市場原理では防止できません。世界一高く設定された薬剤、診療材料費の中で、ビジネスチャンスの拡大を目指しての株式会社参入、民間保険の導入(混合診療)を促進すれば、海外の泥棒に追い銭になります。

米国型医療に転落することは避けねばなりません。世界でも稀な公共事業費と社会保障費の比が逆転している日本の医療が危機を迎えています。

(第一病院院長・医師 57期)

論壇

台風の日

坂井 俊彦



日本列島に上陸する台風の数には年平均二・六、最高記録は六であった。それが今年十一月中旬現在で十を数え、記録を更新中である。

筆者は一度だけ、台風の「目」を経験したことがある。風がびたりとやんで、青空すら顔を見せる妙な瞬間であった。渦中にいるとかえって全体像が見えにくくなることは事件や騒動でもよくある。

「目」を抜け出たら、素早く正しい判断と対応を心がけたいが、これがなかなか難しい。約二十年の記者生活での自戒も込めて紹介する。

筆者はいま、日本の少子高齢化・人口減少の行方とその影響を研究している。そして、現在の日本で進む少子化の水準は異常であり、どちらかといえば望ましくない影響をもたらすと考えている。そこで思うのは、数十年間続いている少子化への対応が何故これほど遅れたか、という疑問である。

広い意味での「少子化」を、出生率が「将来的に現在人口の維持ができる水準」を下回ることと定義すれば、それは一九七四年から続いている。ここで言う出生率とは、一人の女性（実質的には男性と二人）が一生の内に産む子どもの数を示す指標「合計特殊出生率」で、人口維持には「二プラス」が必要となる。この水準、「人口置換水準」は、現在の日本では二・〇七。

日本は一九七四年の出生率が二・〇五となつて以来、二〇〇三年の一・二九ま

で三十年間ずっと、少子化が続いているのである。後智恵では、「確かに人口は経済成長を規定する重要な要素だ。日本の高度成長が終わった時期とビタリ一致している」と感心したくなるが、その当時、少子化が議論された気配はほとんどない。日本で少子化が一般に広く意識されたのは、九〇年六月に発表された八九年の出生率が「丙午（六六年）」の「一・五八」を下回った「一・五七」ショックからである。これを機に、育児休業法の制定、子育て支援強化の「エンゼルプラン」など少子化対策を開始したが、既存のように出生率は下がり続けている。

この辺で、出生率の歴史を紐解いてみる。太平洋戦争が終わって、兵隊や軍属が大量に家庭に戻って「団塊の世代」のベビーブームが始まった四七年には約二百六十八万人の赤ん坊が産まれ、出生率は四・五四であった。戦後の貧困は、子づくりより産児制限を選択させ、出生率は急降下する。わずか十年後、即ち私たちが高々七十五期の大産が産まれた五七年には早くも初めて人口置換水準を割ってしまった。五八年はやや回復したが、翌五九年から六四年まで六年間、水準割れは続いた。

このように、七四年の前にも、将来の人口減少につながる「出生率の異変」はあったが、このときも大きな議論にならなかった。

実は、厚生省の人口問題審議会は、六九年の中間報告で「わが国の出生力は世

界最低の部に属し、人口学的基準からみても下がり過ぎている」と最大級の警鐘を鳴らしている。しかし、専門家以外から大きな共感を得られなかった。何故だろうか。

日本は国土が狭く、人口密度が高すぎる、という考えが長い間支配的だったことも理由だろう。戦後すぐは貧困から脱却するため、また七〇年代以降は地球環境や資源枯渇の面から人口を抑制する必要があるという考えが強く出てくる。また、出生率が下がっても団塊の世代を中心に出生適齢期の女性の人口が多ければ、出生数はそれほど減らない。六〇年代から七〇年代半ばはこんな状態が続いた。さらに、予想を超えて寿命が延びたために、少子化が人口減少に直結しなかったこともあるだろう。先進国の中でも日独伊の旧枢軸国の出生率が低いことから、戦時体制下で経験した出生奨励策への抵抗感が強いという専門家もいる。

しかし何と言つても、子どもを産む・産まない、結婚する・しない、が極めて個人的な選択の領域に属する事柄であることが、議論が盛り上がりにくい最大の原因だと思ふ。少子化の弊害を強く指摘して対策を求めることは、主義として子どもを持たないカップル、欲しくてもできないカップル、特に女性に、相当なプレッシャーを与えかねないからだ。

そうこうするうち、日本はあと二、三年で人口が減り始める時代を迎える。百年後には半分以上になるだろう。どんな社会になるか、いろんなことを言う人がいる。ただ、高齢化が進みながら、総人口が減っていく社会がそんなに明るいとは筆者には思えない。米国のように若い移民を大量に入ればいいじゃないか、と言う人もいるだろう。それも含め、みなで考えたい課題である。

二〇〇一年七月の失業率が日本では初

めて五％台になった。筆者は当時、雇用問題担当のデスクをしており、毎月末の失業率発表のタイミングなどにどんな報道をするか考える立場にあった。

失業率は、最高の五・五％まで上がった後、最近では五％を割る水準で推移している。この過程で日本の労働市場に何が起きたか。筆者は、①正社員の賃金まで下がるようになった②パート・派遣・業務請負といった低賃金労働が急増した③若者が労働市場に入りにくくなった、の三点に尽きると考えている。

自分自身が関係した新聞記事を点検すると、「男性正社員」「世帯主」「中高年」については結構書いていたが、若者は五％台突入の約一年後まで登場しない。私たちには「お父さんの失業こそが深刻だ」という意識が強かった。だが、この時期の若者を巡る雇用環境が、「フリーター二百七十七万人、無業者（NEET）五十二万人」（〇四年版「労働白書」）といった流れを加速したとすれば、若者の実態、先に書いた「変化」でいえば③について、もう少し早く丁寧にフォローするべきだったと思う。

と、反省した後で呼んだ「賃金デフレ」（山田久著、ちくま新書）、「若者が（社会的弱者）に転落する」（宮本みち子著、洋泉社新書）といった本に、労働市場の変化と若者について鮮やかな分析が書いてあるので参考にしていただきたい。

少子化にせよ、失業率にせよ、日本がそれまで経験したことのない、いわば「初顔合わせ」の勝負である。そういえば、円高から円安に潮目が変わったとき、デフレの兆候が出てきたときも、政府もメディアも対応に手間取ったように記憶している。これまでの経験で解説不能な変化をどう読みとるか。四十年代後半に入っ

たがまだまだ勉強のようである。
（朝日新聞総合研究本部主任研究員 75期）

星霜は桑田変じて街衢をなさしむ



特別寄稿

牧野 勇

何故なのだろうか。戦争遂行と云ふ國家統制の鍋の中に閉ぢこめられて、煎り廻された四年間だからである。

あつたのは皇國史觀のみである。

反論と批判は許されない。問答無用と大剣を振るって反論を倒すの事例は時流となつた。それは理智の判断と理性の論理は、問答無用と圧殺された。此の事は戦略は蔑にされ戦術のみに走つた武勇伝許りである。孫呉と略は書名のみで荆軻の悲歌が受入れられた。肉弾となつて死すに美学があつた。それは激情の短絡を誘ひ熱情の昂揚感を尊んだ。死を以て当れば全てが解決する。と単純に信じて疑はなかつた。が然し戦局の窮迫は絶望感を醸成し一層の拍車となつたのである。此の安易な死生觀は一種の原初体験となり後年どんなに苦しんだ事だろう。

あの頃、既に戦局は敗色濃厚となり死の影に怯えつつ利那主義に陥りつつあつた。通年動員は吾々に何を教へたらう。それは退廃の世相である。

入学から卒業までの四年間は開戦から終戦までの四年間を軌を一にする。戦争遂行の圧殺の下に飼育されたのは吾等四五回生である。勉学は押しやられて工場へ、中学生としてカリキュラムの完成期の云はば収穫期が無になつてしまつた。

此の喪失は大きく、後遺症は今に及んでゐる。何年か前の卒業生に比べて劣つてゐると思ふ。

だが異常な体験の下に自然に結ばれた友誼は強く太い友情の絆となつて今に至つてゐる。吾等四五回生は四五会を結成し、参集日一月二日の午後三時とし、語呂もよく一二三四五会とした。昭和二十一年に初会を持つて綿々五八年續いてゐるのである。当時の先生を御招きしての会であるが、凡その方々は何故され現在は剣道の中島先生である。又吾等は関西旅行は中止された。数年前から有志で関西旅行を挙行し、山陰旅行には錦織先生の墓参もした。又有志一同で毎月東京散策会を企画し、江戸の名所旧蹟を訪ねてゐる。早や皆耗の字の祝いの年である。老いを感じさせぬ万年青年も何人か居る……

正門を出る。前方に榛名と赤城の山嶺を仰ぎて蒼空を望み視線を落とせば野原の末に堤が横一線に薄緑の帯をなす。乾いた白茶気た土道が折線となつて野や畑を左右に分けてゐた。堤の向ふに屋根、白壁、木々が小さい細工物の様に並んでゐる。それが私達の乗附の野の風景である。現在はない……。卒業して六十有余年の星霜は、桑田変じて街衢をなさしめた。中学は夢幻茫々の彼方である。

昭和十六年十二月八日。是は全てを変へてしまつた。寒い朝だつた。ラヂオが突然軍艦マーチを奏でる。大本営発表。「我が國は今朝太平洋域に於いて米英兩國と交戦状態に入れり」。そして突然の戦果の発表。驚愕と共に清冽なものが走つた。だが僅かながら本當なのかの疑念があつた。勝利なのか、目前の事件の大きさに幻惑され、夢遊病者の如く学校へ歩いてゐた。東雲を輝かす朝日は林立する桑の枯枝の霜を光らしてゐた。あの東雲の彼方に何が起つてゐるのか。大きく叫びたい気持ちで道を急いだ。此の瞬間から私達は熱病に罹つてしまつた。戦ひは中学一年生で始まり卒業と共に終つた。あの四年間の日々を今思ひ出して見て一口で云へば「おぞましき日々」としかくくり様がない。

入学から卒業までの四年間は開戦

(45期)

恒例の高高同窓会総会及懇親会は平成十六年一月二十四日滞りなく行われた。この盛況の中で校歌を唄う時だけは、気持ちの高揚とはうらはら、新校歌を唄う事が出来ない。現在応援歌となつてゐる「翠巒」を校歌として三年間、いやそれ以後もこの曲しかなじみがない。そこで提案一、ある時期テープにして配布したように聞いているが、再度企画していただければ有難いし、“単なる校歌”として歌詞を追うのでもなく、又、この間友人との雑談時間として費やす事もなくなり、高揚この上ないと考え、検討頂ければ幸いです。

提案二は、新校歌「三番」についてであります。先日の同窓会で久しく会わなかった同期の友人（当時は応援団長として勇名をはせた）から、「一番に上州の三つの山は……とあり、一番が榛名山で、二番が赤城山、三番がなくてしかも妙義山がないのはなぜなんだ！俺は毎日妙義山を眺め、信越線を通ったんだぞ！おかしいじゃないか！」との剣幕、以前から疑問を持っていたが再度その思いを強くした。同感の声と共に彼を慰めるはめとなる始末であった。上州の三つの山とは三つ揃ってこそ群馬の大きな特徴である。

当時、新校歌制定に際し、作詞者から原稿が提出された時に、多勢の委員の中に一人として何の疑問も持たなかったのだろうか。当時立会っ

た方や、何か文献はないかと思つてゐる矢先、たまたま六十周年記念誌（昭和三十二年）を持っていた体育会のY氏から借りる事が出来た。新校歌制度のいきさつ等、当時関わっていた先生方の内、内藤元校長、永長先生の稿や作詞者、作曲者の談話を読んでみましたが、何のヒントも説明らしきものもありませんでした。現役時代に新校歌と接しなかった者が何となくしっくりいかないのと同様、妙義山を毎日見ながら通った人

二つの校歌



特別寄稿

濱名 光彦

達にはなおさらではないだろうか。現在まで信越線を通った人達は多いだろうし、現役学生も多くいるはずで、どう思っているのか聞いてみたい気もします。この思い募るばかりで、皆様にどう伝えられるかの術もつき、とうとう一つの試みとして、自分で三番を作詞してしまつたしだけです。

借越はなほだしい限りで、作者に對する冒瀆かも知れません。おしかりを受けるかも知れませんが校歌を唄う者に免じてどうかお赦しを願ひ、提起をさせていただければと思います。又、同窓諸兄も賛同いただけるようでしたら唄ってみたり、添削なり、又当局で正式に公募制定等して頂ければ幸いです。兎に角、上州の山三つを揃えて誰もが楽しく唄えるよう切なる思いからペンをとりました。

作者の方にどれだけ迷惑が及ぶか、細かい事はよくわかりませんが、他にも疑問を持つ方は多いと考え、赤面の思いで提起をさせて頂きました。ここに私の補作詞をあげておきます。

群馬県立高崎高等学校校歌

濱名光彦 補作詞

三、村雲分ける日の影 希望の下に

行くは安穩の 明日へのパワー

緑なす地を 生きる如くに

妙義山 巖山越えて

艱難辛苦の学舎にて 友よ

意気高く 更に進まん

高崎 われらが母校

完璧の心 伝えゆけ

（有）濱名造園設計研究室

代表取締役 55期

高高の思い出



特別寄稿

松本 修

同窓会報への寄稿を依頼されて、
久し振りに高高時代を振り返って見ま
した。

まず目に浮かぶのは畑や田んぼに
囲まれた校舎。私の高高在学は、昭
和三十八年四月からの三年間でした
が、当時は、今では想像もできない
くらい、高高的周辺には何もありま
せんでした。その田んぼ道を、四季
折々の変化を見ながら通ったもので
した。通学の道から眺める様名や赤
城の姿は見事でした。

烏川の乗附側の土手も、当時は未

整備の土手で、下校途中、その草む
らに腰掛けて、高崎の町や背後の山
並を眺めながら、色々なことを考え
ました。

あれは何年生のときのことでしょ
う。翠巒祭の前夜、下校途中に国道
十七号線を行くとき、川向こうの暗
く沈んだ高高的の方角から、太鼓の音
がドーン、ドーンと聞こえていまし
た。十七号線も、まだその程度に静
かだったのでしょうか。高高時代を
思い出すと不思議にこの情景と気持
が蘇って来ます。今思えば、明日か

らの翠巒祭への期待とともに、初夏
の空気の中で、先に広く開けた自分
の人生を感じていたような、そんな
気分だったと思います。

二年生からは応援部に入っていた
できました。放課後、護国神社の境
内で、木の間越しに見える高崎の町
に向かって声を張上げ、応援の練習
をいたしました。夏の高校野球では、
前橋の敷島球場に通い、炎天下のス
タンドで、ブッカキ氷をかじりなが
ら、文字通り熱い応援をいたしまし
た。同じ六十五期の永井 功氏は、
この時の応援部長で、その気迫を密
かに畏敬しつつ、深い付き合いをさ
せていただきました。この親交はい
まだに続いております。

勉強やクラブ活動を通して、真面
目とは何か、正しいことは何か、な
どと、その年頃らしい疑問を突詰め
て考えたのもあの頃でした。そして、
その思索の結果を極端に現実の行動
に反映させようとした時代でもあり
ました。

今思うと、高高的は、私にとって、
自然に親しみ、良き人々に恵まれな
がら、自由に心身を成長させること
のできた、理想的な環境でありまし
た。その中で、私は来たるべき大人
時代に向けて、自分の基礎を形成し
たのだと思います。

その高高時代も、もう四十年の昔
になりました。

この間に、私は、東京に出て役所
で働き、結婚して子供を二人育てま
した。

高高時代の考えや夢は、日々の生
活の塵芥に埋もれましたが、潜在的
には、これらは、私という人間の基
調として在り続けたのだと思います。
仕事の折などに、どこか珍しい場
所に行くと、その場所で応援歌「翠
巒」を口ずさむのを常としておりま
した。

皆さん、ピラミッドの頂上でも「翠
巒」は歌われたのですよ。

高高的の痕跡を色々な場所に残した
いという単純な気持ちでもありまし
たが、同時に、人生のイベント毎に、
高高時代の自分を引出して来て、今
の自分と照らし合わせていたように
も思います。

今では、子供達も果立とうとして
おります。職業的にも現役を終え、
身体にも以前ほどの自信がなくなり
ました。さて、自分はこれからどう
しようという時期に差し掛かってお
ります。

どこに行くにせよ、高高的の思い出
を大切に、初心を忘れず、人生の未
知の領域に分け入って行こうと思ひ
ます。これからも「翠巒」を歌いな
がら。

(社)海外鉄道技術協力協会

専務理事 65期

卒業してから早いもので、二十年近くが経ちました。思い出は、あたかも昨日のことのように蘇ってきます。松井先生、川嶋先生、加納先生にはたいへんお世話になりました。

この二十年間、時間は矢のように過ぎ去り、当時の思い出などじっくり思い起こす余裕もなかったように思います。在学中は成績不良で、自分の人生について、かなりの不安を感じながらも、なぜかマイペースに「ぼんやり」と過ごした三年間であつたと思ひ起こされます。それでも、自分の人生においては、大切に、多感で、楽しい時期でありました。ある意味、精神的に未発達で、社会的責任というのにはまるで無頓着。そして、何も気づかない幼稚な子どもだったのでしよう。

同級生たちはそれぞれの道に進み、私は二浪の末、大学に進学して体育会ゴルフ部に所属しました。授業のない日には部員仲間と、提携していた伊豆の川奈ホテルゴルフ場でキャディーのアルバイトに明け暮れ、バイトの後には日がくれるまで白球を打ち続けておりました。伊豆川奈の夕陽が海にゆつくりと沈み行く光景は、海のなない群馬で育った私には幾度見ても飽きることない生涯忘れ得ない美しい思い出のひとつであります。

私が進んだ（遊んだ）大学は非常

に「こぢんまり」としており、同学年に高高同窓生はおりませんでした。しかしながら、大多数の大学の友人たちは「高高（タカタカ）」を知っており、これは皆さんもご経験があるかと思ひます。同様に、就職をしてからも、同じ経験をし、さらに各

思えばいつも 高高がある

界で活躍される諸先輩方の話題が、時として初めてお会いした方とも共通の知人、話題の人物ということまで話しが盛り上がったことも多々あります。ちょうど福田越夫先生、中曾根康弘先生の母校ということで、認知度が高かった印象が強く残っております。

九年間の会社員生活に区切りをつけ、昨年統一地方選挙において高崎市選挙区より出馬し、県議会議員に初当選をさせていただきました。

同級生、先輩後輩の間柄というのはありがたく、年月の経過、世代の違いは存在しないかのごとくに皆様のご声援を五感全体で感じました。感謝するばかりです。とりわけ、卒業以来の同級生が応援に大勢駆けつけ、自分の人生においては、かけがえのない友人たちとなりました。「友は一生の宝」でしょう。当時、そん



特別寄稿

橋爪 洋介

なに喋った記憶もない同級生ですら、時間の流れがすべてを押し流して、なんのためらいもなく応援してくれたことに自然と涙が溢れたものです。現在の職場である県庁にも十四人の同級生と、数多くの先輩や後輩たちが勤務しております。先輩議員としても、松沢陸奥議員（四八期）、木暮繁敏議員（五三期）、荻原康二議員（六三期）、伊藤祐司議員（七五期）、岩井均議員（八一期）が、活躍されています。現在、高高との関わりは、毎年行われる卓球部の現役OB交流試合、合宿にお邪魔して、しばし汗を流しております。昨年はSSH校に関する行政視察で訪問をさせていただきました。終わりに、昔と変わらず生き生きとして、やんちゃな高高にいつまでもエールを送り続けたいと思います。

（群馬県議会議員 85期）

<2>ケネディスペースセンター(KSC)

“きぼう”の見学：KSC最大のイベントは、近々宇宙へ打ち上げられる予定の、日本のISSモジュール“きぼう”の見学である。JAXAの協力で、一般には公開されていない貴重な体験ができた。施設に入ると、そこには日本の“きぼう”だけでなく、これから打ち上げられようとしている各国のモジュールが並べられていた。なんとも言えぬ感動で、背筋には微弱な電流が流れっぱなしであった。薄防塵服を着た作業員の方の作業を見ながら、JAXAの高橋さんが各部の説明をして下さった。



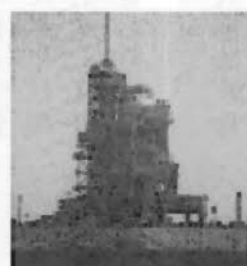
ガイドツアー



組立施設



アポロ/サターンVセンター



LC39

Up-Closeガイドツアー：KSCの施設3箇所をバスで巡るツアーで、シャトル組立て施設、LC39（発射台）、アポロ/サターンVセンターを訪れた。1週間前に襲来したハリケーンの影響が残り、発射台の近くまでは行けなかったが、その規模の大きさを肌で感じ取ることができた。

<3>マサチューセッツ工科大学(MIT)

MIT博物館：MITでまず訪問したのがMIT博物館である。MITの研究者、技術者が芸術性溢れるメカニクやフォトなどは、その独創性や発想の多様性などの面で、只々驚かされるばかりである。



MIT学生体験談：MITの学生合田圭介さんが、MITの学生生活、研究生活などを話してくれた。アメリカの大学と日本の大学の違いや、日本の高校生へのアドバイスなど参考となることが多かった。その後4人のMIT学生によるパネルディスカッションがあり、派遣生から多くの質問が出されていた。

MITキャンパスツアー：4グループに分かれ、MIT日本人学生の案内で、研究室や図書館などを訪問した。緊急用発電所もあり、学ぶための施設は十分すぎるほど充実している。グループを案内してくれた桑田さんは航空宇宙工学専攻。研究室の中まで案内していただき、研究生活の雰囲気を感じた。



MIT学生との夕食会：MIT日本人会の方々12名を交え12のグループに分かれてテーブルを囲み、学生生活や高校時代のことなどの話を直接聞くことができた。巨大なロブスターを前に2時間ほど話が弾み、派遣生は忘れられないひと時を過ごしたようだ。＜この夕食会を最後に11日間の日程が終了した。＞

今年で指定3年目を迎えたSSHであるが、今回紹介したNASA派遣事業を中心に、さらなるプログラムの充実を図り、大きな成果を得ているようである。このSSH事業は、詳細は未定ながら次年度以降も継続の予定であり、また、次年度からは文系分野に焦点を当てたHS（ヒューマン・サイエンス）の取り組みを始めようという計画もある。同窓諸兄の皆様には、母校高々の益々の発展をご期待いただきたい。

なお、末筆ながら、SSHを初めとする高々の教育活動に対し、多くの同窓諸兄より多大なるご協力をいただき、同窓会として、紙面を借りて御礼申し上げる次第であります。

特集

SSH NASA派遣事業報告

昨年度紹介した「SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）」事業の一環として、今年度は第二学年の希望者を対象に、NASA派遣事業が実施された。群馬県主催により、本校と同じくSSHの指定を受けた高崎女子高校との共同実施であるが、今回の特集では、この事業の概要を紹介したいと思う。

1. 研修の目的：①宇宙開発に関する科学技術の成果と今後の課題について考察し、宇宙開発と人間生活のかかわりについて探究する。
②NASAではたらく科学者・技術者と接することにより、NASA及び宇宙開発をより身近な存在としてとらえ、自らの進路選択の一つのあり方として考える。
2. 研修地：アメリカ合衆国（ヒューストン、オーランド、ボストン）
3. 研修期間：平成16年8月18日（水）～28日（土）
8月18日（水） 成田→ヒューストン 8月23日（月） ケネディスペースセンター（KSC）
8月19日（木） ジョンソンスペースセンター（JSC） 8月24日（火） ケネディスペースセンター（KSC）
8月20日（金） ジョンソンスペースセンター（JSC） 8月25日（水） オーランド→ボストン
8月21日（土） ヒューストン→オーランド 8月26日（木） マサチューセッツ工科大学（MIT）
8月22日（日） ディズニーワールド（エプコット） 8月27日（金）・28日（土） ボストン→成田
4. 参加生徒数：高崎高校2年82名。高崎女子高校2年35名3年8名（計43名）合計125名
5. 引率教諭：県教育委員会 飯野真幸（団長）、田口哲男、
高崎高校 猿谷亮司、関根正弘、丸橋 覚、天野正明（高女教諭2名）計8名
6. 経費：1人当たり337,000円（航空運賃、バス、宿泊代291,932円、研修諸費用34,236円、渡航手続10,832円）
7. 主な訪問先

<1>ジョンソンスペースセンター（JSC）



JSCエントランス前にて（土井、中村氏らと共に）

トラムツアー：トラムに乗ってJSCの施設をめぐった。アポロ計画等で指揮をとっていたミッションコントロールセンターに入った途端、鳥肌が立った。緊急脱出用の宇宙船X-38の見学後、宇宙飛行士訓練棟では、実物大のスペースシャトルや国際宇宙ステーションの模型が並んでいた。

土井隆雄宇宙飛行士・中村圭子博士講演会



土井宇宙飛行士と中村博士の講演会

最初の訪問地はNASAのジョンソンスペースセンターである。我々はここで2日間を過ごした。

1日目はトラムツアー、NBL（無重力実験棟）の訪問、そして3つのActivity。敷地面積の広さに驚き、サターンVロケットの大きさに圧倒された。

2日目は、NASA研究者のGray教授や土井宇宙飛行士と中村教授の講演会などが行われた。通常はなかなか話を聞くことのできない土井宇宙飛行士やNASAの研究者の講演会を聞くことができ、充実した研修となった。



ミッションコントロールセンター



宇宙飛行士訓練棟

JSC最後のプログラムは、日本人宇宙飛行士井隆雄さんとNASA研究員の中村さんの講演会だった。土井さんからはスペースシャトルの中の様子や宇宙における船外活動の様子をビデオや写真を交えて話をいただいた。中村さんは火星の石、隕石等の研究について話していただいた。JSC訪問における最高のイベントで幕を閉じることができた。

海外の
同窓生

アメリカ・ ダラスからの便り



赤羽 英光
(アメリカ合衆国在住)



成田空港からダラスに約十二時間のフライトで到着、現在はアメリカン航空が一日平均約一・五便の直行便を飛ばしています。ダラスは人口約百二十万人のテキサス州第三位の都市で日本の長崎とほぼ同緯度にあたり、一年中暑いように思われるかもしれませんが、冬は平均気温が氷点下になる日が一ヶ月近くある一面もあります。テキサス州はかつてメキシコ領で、一八四五年まで独立した二国家「テキサス共和国」だったという歴史を持っており、代々受け継がれてきた独立心が「テキサス魂」を生み、何でも大きなものや一番が好きだという気質のもとになっているようです。事実テキサスでは、全長六メートル近いフルサイズのピックアップトラックが全米一多く走っています。またダラスは映画「ダラスの暑い日」で再現されたようにジョン・F・ケネディ大統領が暗殺された都市ですが、ダウンタウンは写真のような近代的な高層ビルが林立する近代都市でもあります。

このダラスに社命により単身赴任して約二年半が経ちました。勤務するサンデン株式会社はカーエアクンコンプレッサーを主力商品として、アジアや欧米二十二ヶ国に現地法人を設立し、ここアメリカでもビック3や日系の自動車メーカーに商品を納入しています。初めての海外生活でやはり戸惑うのは「言葉」「文化」の違いです。衣食住といった普段の生活でも慣れるまで色々大変な面もありましたが、ここダラスには日本人が二千人余り暮らしていることもあり、日本食レストランは三十軒余り、また日本の食材もある程度手に入ります。またガソリンは約11/ℓ、缶ビールは約80/本、床屋は約\$12と物価の安さは普段の生活の中で体感できます。

一方「英語」は高同世代を含め十年近く学習したわけですが、会社での会話は何とかなるものの外に出ると耳がつかない感じが、やはり「Patience」が多くあります。さらに言葉以上に戸惑うのは、やはり「文化」の違いです。現在三十人余りの現地人の部下を持っていますが、アメリカ人は自分が納得するまではっきりと自分の考え方を主張し、また家庭第一で余程のことがない限り遅くまで残業をすることはありませし有給休暇もしっかり取ります。ただ一方自分が理解しさえすれば、後は「Yes Sir」で決められた範囲の仕事はきっちりこなします。この辺はアメリカの契約社会の一面を垣間見ることができ

またアメリカ人は一般的に非常に「星条旗」好きで、誠実なカトリック教徒といます。普段から玄関に星条旗を掲げている人、独立記念日や9・11に星条旗をあしらったTシャツを着ている人は数知れませんし、また日曜はかなり人が教会に礼拝に出掛けるので十一時以降に開店する店舗を多く見かけます。この辺は日本人と違い、何か形のあるもので同じ国民として結びつかざるを得ない多民族国家であるアメリカ合衆国の特徴と言えるかも知れません。

さて高同世代そして就職後も高の先輩後輩の方々と一緒にプレイしたサッカーを、このダラスの地でも今度は世界各国の人達と楽しんでいます。スポーツに国境はないと言いますが、言葉が通じなくともひとつのルールのもと一つのボールを一緒に追いかけて、オリンピックにも引けを取らないような国際交流を実践しています。

海外に出て違う文化に触れることの良さは、何より改めて故郷日本の文化・歴史を振り返りその良さ悪さを見つめ直す機会を持てることであると実感しています。同窓生の皆様も機会があればぜひ一度日本を外から見られてはいかがでしょうか。

(株)サンデン アメリカ工場勤務 73期



同窓会だより

同窓会だより 1

群馬大学医学部看護同窓会

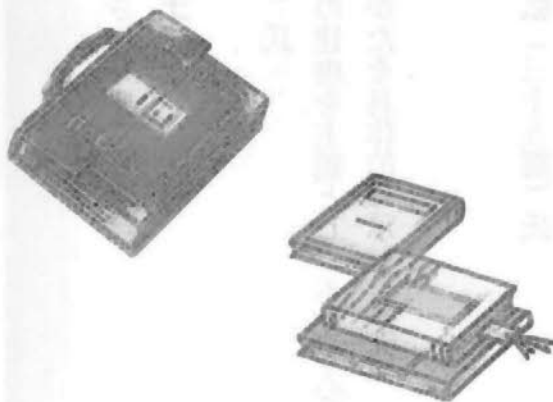
代表幹事 横尾 英明

群馬大学医学部医学科の卒業生、学生、および他大学出身で群大病院に勤務する高同窓生で構成されるこの会の特徴は、なんといっても高女出身者もメンバーに加わっている点にあります。すでに数十年の歴史があり、例年医学科四年の学生が幹事となり、名簿の作成ならびに新入生の歓迎会を兼ねた年一回の懇親の会を開いております。本年は六月十八日に開催されました。現在、中里洋一(65期)、倉林正彦、田村遼一(ともに73期)の各先生が教授として活躍中で、この同窓会にもほぼ毎回出席してくださるということで、学生たちの出席率はすこぶる高く、教授や医師として活躍中の卒業生と学生との間で、あるいは学年の枠を越えた学生同士の間で、普段の教室では交わすことのない様々な話題で盛り上がりまします。学生から見ると遠い世界の存在と思われがちな教授の先生方が、若かりし日の思い出話を交えながら語りかけて下さるその姿は、学生にとってはこの上ない人生のお手本であり、高女、高女出身者である誇りとアイデンティティを再認識する場ともなっております。ここでは六学年の学生が一堂に会し、全員が自己紹介するのが慣例となっておりませんが、その話しぶりや態度が学年とともに着実に成長し、

一歩ずつ医療者に近づいている姿を目にすることが出来ます。大学を卒業して十数年が経過した私は、後輩たちの姿に頼もしさを覚えるとともに、いつも背中を押されるような心境になります。

宴の終わりには看護と高女の校歌を斉唱して散会となります。今年は特に看護育英会の募金を行い、母校が実施しているこの誇るべき事業に些少なりとも寄与できた喜びを分かち合いました。言うまでもないことです。この募金には高女出身者の善意も込められていることを銘記しておきます。

(群馬大学大学院医学系研究科病理学分野、(財)看護育英会評議員、85期)



同窓会だより 2

日常の交流から 大きな輪に

角田 匡己



五十三期生(昭和二十九年三月卒)の同窓会活動は、五三会(高崎)・一水会(高崎)・二水会(京浜)の三つの輪が、互いに内接し、外接し、時に交差して、微妙な関係を保ちながら今日まで行われて来た。

四十代半ば頃、高崎では、仲の良い連絡のとり易い者同士が適宜集まるという従来の方式を改め、同窓会名簿に基づき、市近辺在住者全てに案内状を送る形にした。会場は、高松荘と魚仲を交互に使い、毎年一回開くというものであった。何年か後、高同窓会新年総会の幹事を五十三期が務める年にあたり、本木君を責任者として、チケットの販売や会の運営に多くの同期生の協力を得ることができた。以後、五三会は出席者が徐々に増え、毎回四十人を超える規模で現在に至っている。

一方、京浜地区でも、期せずして四十代半ばの同期生が、毎月第二水曜日の六時、定宿アイに気ままに出向くという形で互いの情報交換や親睦をはかっていた。世話人は芹沢君、小林君、五十嵐君と引き継がれながら、二十数年にわたり息の長い活動を続けている。

会の形態は違いますが、五三会と二水会は、その勤務・居住地域の関係から、外接する二つの円で、時折り一部交差する関係と言ったことが出来る。

一水会は、成立がこれより遅れた。還暦を迎えた頃、以前東京で二水会に顔を出していた須田君の発議で、本木・山口・羽鳥・室賀・小池君らが皆に呼びかけ、毎月第一水曜日の六時頃から市内のスナック・グロウに集まるということにした。この日は殆ど貸し切りで、六時に行くと席がないという有様。いつも十二、三人は顔を見せ、時によって人が入れ替わるから、ここに入ります。地元同期生は二十数人になる。話題は多種多岐、それぞれの好みや得意分野に応じて、幾つかの場ができる。ゴルフ・海外旅行・釣り・文芸・社会情勢・柳川町界隈事情など。話は移り時は移り、数時間経つことがない。一水会は二水会の例に学んだもので、出席者の円は五三会の円に内接し、二水会の円に外接している。

このように、境遇も立場も異なる個性が、気がねなく交流する場を持ち続けられるということは、各人に、うちとけた中にも礼節を忘れない豊かな心があったことと思う。五十三期という縁の中で、誰もが安らかに身を寄せ、出入りできる、より大きな輪が育って行くことを心から願っている。

(元 高校教師 53期)

◆ 翠樹セミナー

本年度の翠樹セミナーは左記のとおり実施され好評でした。

● 第一回（通算四十九回） 六月十九日（土）

「健やかなこれからの人生に向けて」

上大類病院院長 矢島祥吉（六二期）氏

急速な長寿化に伴う、老後の心身の健康を主題とし、本人の心構えと家族や医療の今後のあるべきすがたを具体的に示した講演。

● 第二回（通算五十回）

「二十一世紀日本の課題と進路」

元内閣総理大臣 大勲位 中曽根康弘（三十五期）氏

今世紀の日本の進路を、ご自身の半世紀を越える政治家生活の中から振り返る。国際法・国益・歴史に鑑み、情報と文化に重点を置いた国家経営の必要性を示した講演。少年時代の浅間の暮色や恩師との交流の思い出から、「結縁・尊縁・従縁」の姿勢が人間性を育てることを語られた。保護者・同窓会理事に生徒を加え、千三百名ほどの受講者のもと盛大に行われた。



◆ 維持会費についてのお願い

会員の皆様には、毎年維持会費の納入についてご協力をいただいております。本当に有り難うございます。お陰様にてここ数年は毎年予算額をこえる実績を残してきておりましたが、平成十六年度につきましては残念ながら予算額をやや下回る納入実績（十月一日現在）にとどまっております。ご存じのとおり同窓会の収入は会員の方からの維持会費と新入生からの入会金に依っておりますが、この入会金につきましては、県の指導により来

年度新入生からは卒業時の納入となりますので、来年度からの二年間は各年度約三百万円の減収となり、きわめて厳しい会計状況になることが予想されます。予想される事態につきましては、とりあえず維持会費の増収、経費節減、積み立ての停止等に対応し、できるだけ特別会計からの繰入は避けたいと思っておりますので、会員の皆様にはこうした特別な事情をご理解下さり、平成十七年度の維持会費の納入につきましては格別なご協力をお願い申し上げます。

なお、国立市在住の松田和夫（四十五期）さんから、転居、海外業務等で長期にわたり同窓会活動に協力できなかったお詫びにと、維持会費等として五万円の浄財をお寄せいただきましたのでお知らせいたします。

◆ 次の会員名簿の発行は平成十九年です。

会員名簿が発行されると、これのデータを利用した一般業者による類似の名簿発行や詳細な個人データ収集が行われます。本同窓会の会員名簿は五年ごとに発行しており、次の発行は平成十九年になります。そして、その準備は平成十八年からになりますので、現在は名簿作成作業は行っておりません。なお、会員名簿の構成は卒業年度順となっており、職業別等の名簿は発行しておりません。これらのことをご承知の上、名簿作製のための個人データ確認はがき、電話による問い合わせや名簿購入の誘いに対応して下さい。

◆ 第十九代校長 安居次夫先生ご逝去

平成十六年七月二十五日逝去されました。（享年九十二歳）安居先生は昭和十四年より昭和三十三年まで本校に勤務された後、榛名高校、富岡東高校の校長、県教委指導課長等を歴任され、昭和四十四年から四十八年退職されるまで本校校長を勤められました。つこう二十三年間の本校勤務を通じて「ベシ」の愛称と飄々とした授業で親しまれました。ご冥福をお祈りします。

卒業生の作品紹介 20



宮澤 微笑庵
(88期) 啓



『名残の雪』

昭和九年から二年三ヶ月、少林山達磨寺の洗心亭に住まい、この町を愛し、この町から世界に、日本の美と文化を紹介した、ドイツ生まれの建築家ブルーノ・タウト。

彼は離日する年の早春、名残の雪を見、日記に記しました。その情景、春を待つ土くれと川原の流石にこんもりと積もった名残の雪を、タウトを偲ぶ銘菓(薯蕷饅頭)に創作しました。

真っ白な薄衣のような皮には丹波つくね芋を、餡には丹波大納言を使い、家伝の技法で贅沢に仕上げています。

なお本商品は、パッケージデザイン、ネーミング、商品コンセプトなど、大木紀元先生(五八期:創造学園大学教授)のご指導のもと誕生いたしました。

平成十五年度の「グッドデザインぐんま」選定商品で、前年に続き二年連続の受賞です。

翠戀文庫 BOOK

●著書

□タがあり朝があった

□タクシージャーナルドライバーの言い分 坂口 順一(49期)
一運転席からの人権宣言一

□たったひとりのメディアが走った 坂口 順一(49期)

□必携 スポーツ関係六法 永井 憲一(49期)

□追悼 岡本正己・和子 岡本 宏(40期)

●作者

土岐 正(30期)

坂口 順一(49期)

坂口 順一(49期)

永井 憲一(49期)

岡本 宏(40期)

●著書

□内野一人百首

□社考策悟

□榛名航空工業・産業で働いた人々

□詩集 回帰

□これが東大の授業ですか。

□解決!センター 化学I B

●作者

清水 汜(44期)

星野 茂(72期)

須藤 元夫(43期)

角田 匡己(53期)

佐藤 良明(69期)

金井 明(51期)

牛田 啓太(95期)

小宮 直人(97期)

梅澤 幸平(97期)

平成十六年度 褒章・叙勲受章者(敬称略)

文部科学大臣表彰(産業教育振興)

横田 英一氏(50期)

〈春〉 旭 日 双 光 章(保健衛生功労)

柄沢 英作氏(43期)

〈秋〉 旭 日 重 光 章(農業振興功労)

新井 昌一氏(43期)

旭 日 小 綏 章(酒類業振興功労)

岡村 昌夫氏(52期)

旭 日 双 光 章(地方教育行政功労)

斎藤太喜司氏(42期)

旭 日 双 光 章(薬事功労)

安藤 直典氏(45期)

旭 日 双 光 章(保健衛生功労)

善女寺 秀氏(46期)

黄 綏 褒 章(国土交通関係事業)

山本 忠順氏(63期)

(注) もし漏れがありましたら、恐縮ですがご連絡ください。

母校だより

■各部の活躍・活動

新聞部

私達新聞部は、今年で三年連続知事賞受賞という快挙を成し遂げる事ができました。この結果は私達の努力だけでなく過去の先輩方や顧問の先生達による努力もあつたからこそ成し遂げられた成果です。

私達は、翠巒祭や定期戦に際して新聞を作るだけでなく、ほぼ毎月一回ミニプレスやブランクシートといった学校新聞を発行しています。

もちろん、毎月新聞を発行すると

陸上部

今年、五千メートル競歩でインターハイに引き続き国民体育大会に出場しました。インターハイで実力が発揮出来ず、今度こそは！と意気込んで臨んだ国体でしたが、結果は失格という無残な形となってしまいました。

個人競技と思われがちの陸上ですがインターハイ、国体ともに部員が揃って応援にきてくれ力を分け与えてくれました。そんなところから我々、高々陸上部は陸上を団体競技として日々取り組んでいます。今回二つの全国大会では、残念な結果に終わってしまいましたが自分や応援に来た部員の心に刻まれたモノがあるはず。それを糧に先生方の指



導のもと全国制覇を胸に練習し活躍してくれるはず。応援どうもありがとうございました。今後の活躍にも期待して下さい。

長橋 樹

新谷 亮

SPORTS

運動部

- ①県総合体育大会
- ②関東大会
- ③インターハイ予選
- ④全国高校総体
- ⑤国体
- ⑥県新人大会
- ⑦その他の大会

空手道部

①団体形

予選敗退

団体組手

2 回戦敗退

個人形

土屋和彦 予選敗退
松本照林 予選敗退

個人組手

土屋和彦 2 回戦敗退
松本照林 4 回戦敗退

③団体組手

1 回戦敗退

個人形

松本照林 予選敗退
小此木亮 予選敗退

個人組手

松本照林 ベスト8
宮入将豪 1 回戦敗退

⑥個人組手

小池翔太 2 回戦敗退
小此木亮 3 回戦敗退

団体組手

松本照林 優勝
ベスト8

⑦一・二年生大会

個人形

松本照林 9 位
宮入将豪 予選敗退

個人組手

松本照林 ベスト8
宮入将豪 2 回戦敗退

小池翔太 1 回戦敗退

小此木亮 3 回戦敗退

剣道部

- ①個人戦 金井 ベスト16
- ③個人戦 金井 ベスト16
- 中沢 ベスト16

弓道部

- ①団体戦 準優勝
- 個人戦 大坂亮司 準優勝
- ②団体戦 予選敗退

硬式野球部

- 春季関東地区高校野球大会群馬県予選
2 回戦 高崎7-5 関学大附属
3 回戦 高崎10-0 群馬高専
4 回戦 高崎2-12 高崎商
ベスト16
- 全国高等学校野球選手権大会群馬県大会
2 回戦 高崎7-6 高崎商
3 回戦 高崎5-4 桐生市商
4 回戦 高崎3-2 伊勢崎東
準々決勝 高崎2-1 高経大附属
準決勝 高崎1-10 前橋工
ベスト4
- 秋季関東地区高校野球大会群馬県予選
2 回戦 高崎6-1 沼田高
3 回戦 高崎2-3 常盤高(ベスト32)
○若駒杯(一・二年生強化大会)
地区予選2 回戦 高崎3-4 高崎東

サッカー部

- ①4 回戦 高崎2-0 太田工
準々決勝 高崎1-2 西邑楽
ベスト8

③4回戦 高崎3—2新島学園
準々決勝 高崎1—5前橋商

ベスト8

⑦県高校サッカー選手権 ベスト16

一次予選シード

二次リーグ 高崎0—5伊勢崎東

高崎2—3伊勢崎商

高崎2—2常盤

(二次リーグ敗退)

山岳部

①第10位

柔道部

①団体 第3位

1回戦 高崎5—0高崎工

2回戦 高崎5—0前橋工

3回戦 高崎3—2樹徳高

準決勝 高崎0—4前橋商

個人 松嶋宣繁 第2位

②団体 出場

個人 松嶋宣繁 出場

③団体 ベスト8

1回戦 高崎4—1前橋高

2回戦 高崎5—0中之条

3回戦 高崎1—3育英高

個人

60kg級 芹沢 崇 第2位

66kg級 中野佑一 第3位

81kg級 松嶋宣繁 第3位

水泳部

①五十m自由形 今泉裕太 1位

中間賞之 3位

百m自由形 今泉裕太 6位

千五百m自由形 紋谷祐爾 7位

二百m個人メドレー 費田高弘 2位

四百m個人メドレー 費田高弘 1位

飯野恵太 6位

四百mメドレーリレー 3位

四百mリレー 2位

八百mリレー 3位

②五十m自由形 今泉裕太 出場

二百m個人メドレー 費田高弘 出場

四百m個人メドレー 費田高弘 出場

四百mリレー 出場

八百mリレー 出場

四百mメドレーリレー 出場

③五十m自由形 今泉裕太 1位

福田裕紀 4位

中間賞之 5位

百m自由形 今泉裕太 6位

二百mバタフライ 紋谷祐爾 8位

二百m個人メドレー 費田高弘 3位

白井克尚 8位

四百m個人メドレー 費田高弘 2位

富田悠介 6位

千五百m自由形 大島卓也 6位

四百mリレー 2位

八百mリレー 2位

四百mメドレーリレー 3位

④四百m個人メドレー 費田高弘 38位

⑤少年A八百mリレー 費田高弘 4位

⑥百m自由形 紋谷祐爾 4位

二百m自由形 紋谷祐爾 4位

二百m平泳ぎ 高橋拓也 4位

百mバタフライ 佐俣友規 6位

二百m個人メドレー 深津知由 2位

二百m背泳ぎ 深津知由 5位

谷川洋輔 6位

百m背泳ぎ 柴崎雄貴 6位

二百mリレー 3位

四百mリレー 2位

四百mメドレーリレー 3位

⑦春季新人水泳大会

五十m自由形 大島卓也 3位

紋谷祐爾 4位

白井克尚 6位

飯野恵太 7位

百m自由形 紋谷祐爾 2位

大島卓也 5位

白井克尚 8位

五十mバタフライ 大島卓也 1位

佐俣友規 6位

五十m平泳ぎ 飯野恵太 7位

スキー・スケート部

①大回戦 國田悠樹 11位

橋爪真太郎 23位

回戦 國田悠樹 7位

橋爪真太郎 23位

②大回戦 國田悠樹 22位

橋爪真太郎 途中棄権

回戦 國田悠樹 途中棄権

橋爪真太郎 途中棄権

③大回戦 國田悠樹 5位

回戦 國田悠樹 7位

⑧群馬県選手権大会

回戦 國田悠樹 9位

ソフトテニス部

①団体 2回戦 高崎3—0前橋工

3回戦 高崎2—0高崎北

4回戦 高崎0—2前橋商

ベスト8

②根岸・野尻組 ベスト8

2回戦 4—1那須清峰(栃木)

3回戦 0—4日大豊山(東京)

ベスト64

③団体 2回戦 高崎3—0桐生高

3回戦 高崎2—0館林高

4回戦 高崎2—0伊勢崎市高

準決勝 高崎2—1館林商工

決勝 高崎0—2前橋商

第2位

個人 第1位 清水・神宮組

第3位 根岸・野尻組

第7位 片山・木村組

④清水・神宮組 3回戦 ベスト128

根岸・野尻組 2回戦

⑥団体 2回戦 高崎3—0利根商

3回戦 高崎2—0高崎商

4回戦 高崎2—1高崎北

準決勝 高崎0—2農大二

第3位

個人 富所・神宮組 第3位

植松・今井組 ベスト8

卓球部

①1回戦 高崎2—3前橋南

③1回戦 高崎3—0伊勢崎東

2回戦 高崎2—3中之条高

⑦県強化大会

個人 武井 悠 ベスト16

テニス部

①団体 ベスト8
個人 ダブルス 須藤・青木組 ベスト8
松野・石黒組 ベスト8

③団体 ベスト8
個人 シングルス 鈴木悠平 ベスト8
ダブルス 井上・佐々木組 ベスト8
須藤・青木組 ベスト8
松野・石黒組 ベスト8

⑥団体 第3位
個人 シングルス 松野圭馬 ベスト8
新開康平 ベスト8
ダブルス 松野・石黒組 ベスト8

⑦平成16年度テニスランキン
シングルス9位 須藤涼太

軟式野球部

①2回戦 高崎8-5 桐生高
準々決勝 高崎3-8 高崎商

③1回戦 高崎3-11 太田高
⑥2回戦 高崎0-7 桐生高

バスケット部

①2回戦 高崎76-41 吉井高
3回戦 高崎90-37 伊勢崎東

4回戦 高崎126-36 太田東
準々決勝 高崎100-58 太田高
準決勝 高崎39-60 育英高
第3位

②1回戦 高崎76-95 法政大学第二高校
(神奈川県)

③2回戦 高崎101-20 板倉高
3回戦 高崎98-57 前橋南

4回戦 高崎89-36 農大二
準々決勝 高崎118-70 前橋西
準決勝 高崎90-92 樹徳高
第3位

⑤群馬県選抜チームとして、
藤井琢矢・田村亮が出場

関東ブロック予選 1位
本大会 ベスト16

⑥2回戦 高崎108-26 高経大附属
3回戦 高崎119-43 伊勢崎東
4回戦 高崎85-43 新島学園

決勝リーグ
高崎97-69 高崎商
高崎85-64 育英高
高崎69-84 樹徳高
2勝1敗 得失点差により第2位

⑦関東新人大会
1回戦 高崎63-89 桐蔭学園(神奈川県)

バレーボール部

①4回戦 高崎2-0 太田工
準々決勝 高崎2-0 農大二

決勝 高崎1-2 伊勢崎東
第2位

②1回戦 高崎0-2 勝田工(茨城)
③4回戦 高崎2-0 前橋高
準々決勝 高崎2-0 太田東
準決勝 高崎2-1 桐生商
決勝 高崎0-2 伊勢崎東
第2位

⑤1回戦 群馬1-2 山口
群馬選抜チームとして、
福田俊介・伊田 剛が出場

⑦西毛地区大会
2回戦 高崎2-0 高崎工
準決勝 高崎2-0 農大二
決勝 高崎2-0 中央高
優勝

ラグビー部

①準決勝 高崎0-57 農大二
第3位

⑦県1年生大会
2回戦 高崎5-36 明和県央

陸上部

①(3)をかねる

五千m競歩 長崎 樹 1位
山口 裕毅 8位
八百m 小杉 健 8位
二千五百m 小杉 健 8位
五千m競歩 長崎 樹 1位
五千m競歩 長崎 樹 予選失格
五千m競歩 橋本 準 2位

槍投げ 伊丹達生 3位
円盤投げ 田村 司 5位
⑦学校対抗
千五百m 星野慎也 7位
八百m 小杉 健 8位
四百mH 小杉 健 3位
五千mH 中島智孝 4位
ハンマー投げ 橋本 準 5位
川端 佳太 8位

バドミントン部

①団体 2回戦 高崎2-0 渋川高
3回戦 高崎1-2 館林高

シングルス 秋池 5回戦
ダブルス 高崎・瀧野 4回戦
安藤・金田組 3回戦
三井川・福田組 3回戦
大久保・水口組 3回戦

③1回戦 高崎3-1 関学附属高
2回戦 高崎0-3 太田高
⑥団体戦 2回戦 高崎2-3 前橋高
1年生シングルス 岡田 3位
2年生シングルス 柴田 5回戦(ベスト32)
ダブルス 柴田・深代組 4回戦(ベスト32)

⑦高崎市シングルス大会
高崎・野尻 B級3位
大久保 C級1位
水口 C級2位
秋池・神田 C級3位
県高校生大会
柴田 6回戦(ベスト8)
秋池 5回戦

学芸部

将棋・囲碁部

○県高等学校将棋選手権大会
男子団体3位

○全日本高等学校竜王戦群馬県大会
井上知也 3位
竹村和祥 3位
○関東高文連将棋大会群馬県予選
井上知也 3位

○第二十八回群馬県高等学校
囲碁選手権大会 出場
○第二十回関東地区高等学校
囲碁選手権大会群馬県予選
団体優勝(関東大会出場)

吹奏楽部

○アンサンブルコンテスト県大会
金賞(県代表)

○アンサンブルコンテスト関東大会
フルート四重奏 銀賞

○県吹奏楽コンクール
A組 銀賞

新聞部

○第十八回群馬県高等学校新聞コンクール
県知事賞
○第八回全国高校新聞年間紙面審査賞
優良賞

美術部

○第二十八回群馬県高等学校
芸術祭美術部門展
優秀賞 内海裕一郎

文芸部

○第六回高校生文芸道場
関東ブロック大会参加

弁論部

○第三回群馬県高等学校弁論大会
優良賞 大嶋慎也

鉄道研究部

○10月10日(日)
群馬公共交通フェアに鉄道ジオラマ出展
○10月23日(土)・24日(日)
高崎市間屋街グランパザールに鉄道ジ
オラマ出展

第58回定期戦

今年の定期戦は一つの衝撃から始まった。それは塚本先生からの一言だった。「今年の定期戦は前高が工事を行うので、会場を高々に移して行う。」という内容であった。

思いもよらぬ事で始まった第58回定期戦は21-12と高々が前高をリードし、決戦の日、十月二日を迎えた。数年振りの一般対抗の水泳での敗戦が高々生の気持ちに火を付けたのか、その日の高々生には凄まじい気迫が感じられ、一般対抗の綱引きでは完全勝利という結果を収め、一般対抗では前高に僅差で勝利した。また、部活対抗の方ではラグビー部が103-0で勝利するなど高々が30点差で勝利し、定期戦全体では33点差をつけての勝利という結果に終わった。この勝利は高々全員でつかんだ勝利であり、この場を借りて、奮闘してくれた高々生、先生方に対して感謝の意を表したい。

定期戦を振り返ってみると、敗けた年もあったが、すばらしい事ばかりであったと思う。友と共に汗を流し、一生懸命頑張るということにまさに青春と呼べることであったと思う。高々生、前高生みんなには定期戦規約にもある通り、生徒の自主性をもって定期戦を続けて欲しいと思うと共に、高々と前高がこれからも良きライバルとして、切磋琢磨し、発展することを心から願う。

(第58回定期戦実行委員長 青代秀太)

進路状況 (全日制) ()内は現役

大学	年次	14年	15年	16年	大学	年次	14年	15年	16年
北大	大	6(5)	7(6)	4(4)	慶應大	大	64(42)	36(21)	59(48)
東北大	大	21(18)	23(16)	17(15)	早稲田大	大	66(39)	53(33)	73(51)
筑波大	大	3(2)	3(1)	6(5)	中央大	大	60(51)	47(33)	61(50)
千葉大	大	3(3)	8(7)	10(5)	明治大	大	53(43)	45(30)	53(39)
群馬大	大	15(13)	23(16)	8(8)	上智大	大	6(3)	9(3)	8(7)
(医)	大	6(4)	5(4)	5(5)	立教大	大	19(10)	19(14)	21(18)
埼玉大	大	8(8)	4(1)	4(2)	学習院大	大	7(4)	2(0)	5(1)
東京大	大	15(12)	12(7)	12(11)	青山学院大	大	13(13)	16(12)	13(8)
一橋大	大	6(2)	0(0)	1(1)	法政大	大	33(27)	25(19)	31(27)
東工大	大	11(4)	1(1)	6(6)	日本大	大	51(46)	53(36)	53(37)
横国大	大	5(5)	7(7)	6(4)	東京理科大	大	85(65)	75(54)	81(63)
新潟大	大	13(13)	15(10)	12(9)	芝浦工業大	大	22(21)	44(36)	31(27)
金沢大	大	7(6)	7(5)	6(5)	同志社大	大	2(2)	5(5)	4(4)
信州大	大	2(1)	1(0)	7(6)	立命館大	大	22(21)	27(21)	12(11)
名古屋大	大	1(0)	4(4)	2(2)					
京都大	大	4(2)	3(2)	6(4)	高経大	大	8(6)	11(7)	9(8)

第58回定期戦得点表

部対抗		種目	一般対抗	
高々	前高		高々	前高
		水泳	3	6
		駅伝	6	3
		綱引き	9	0
		玉入れ	3	6
		ソフトボール	3	6
0	6	卓球	4	5
0	6	陸上競技	6	3
6	0	ソフトテニス	3	6
6	0	バレーボール	5	4
6	0	バスケットボール	4.5	4.5
6	0	柔道		
0	6	剣道		
6	0	弓道		
6	0	空手道		
3	3	サッカー		
6	0	ラグビー		
0	6	硬式野球		
6	0	軟式野球		
6	0	硬式テニス		
57	27	小計	46.5	43.5
103.5	高々	総合	前高	70.5

人事異動 (平成16年度)

退任者・転出者

校長 小林克茂 退職

教頭 富所三郎 榛名高校 校長へ

進路部長 関根正史 下仁田高校 教頭へ

国語 浦野克彦 高崎商業高校へ

英語 木本陽子 県立中央中等教育学校へ

保健体育 櫻井 清 高崎工業高校へ

数 学 小澤龍雄 退職

(通信制) 真藤克裕 高崎北高校へ

転任者

校長 栗原 健 前橋女子高校より

教頭 飯塚 光 市立伊勢崎高校教頭より

国語 渡辺正一 伊勢崎東高校より

英語 山田 楓 富岡高校より

世界史 曾根秀朗 伊勢崎女子高校より

(保健体育) 船戸 渉 大間々高校より

(通信制) 中島隆一 富岡高校より

(通信制) 塚田雄介 新採用(地公産)

高高同窓会 予算決算報告

平成15年度 通常会計 (平成15年1月1日～平成15年12月31日)				
収入の部				
費 目	平成15年度予算	平成15年度実収入	備 考	
前年度からの繰越金	592,626	592,626		
入 会 金	3,000,000	2,997,000	360人	
維持会費	6,000,000	6,244,460	2,192人	
利 息	374	84		
雑 収 入	10,000	361,000	百年史繰り入れ・ネクタイピン等	
合 計	9,603,000	10,195,170		

支出の部				
費 目	平成15年度予算	平成15年度実支出	備 考	
会 議 費	1,000,000	877,700	新年総会準備金ほか	
祝 賀 費	800,000	809,640	叙勲記念、卒業九箇ほか	
饗 別 費	300,000	120,000	平成15年度離任職員	
慶 弔 費	200,000	121,445	葬儀花輪代等	
通信印刷費	500,000	462,967	維持会費納入札状、電話代、郵送料等	
旅 費	100,000	100,000	東京同窓会出席者旅費	
会報発送費	2,000,000	1,640,463		
同窓会報費	1,000,000	933,089		
事 務 費	1,500,000	1,215,649	事務職員人件費、事務用品等	
同窓会長賞費	200,000	89,774	文藝代	
補 助 費	600,000	600,000	図書館、翠雲体育会へ各30万円	
環境整備費	500,000	428,300		
雑 費	300,000	158,677	維持会費振込手数料	
予 備 費	603,000	84,000	山口薫園伯の絵画額縁	
合 計	9,603,000	7,641,704		

差引残高 2,553,466円

特別会計積立

収入の部			
前年度からの繰越金	8,211,662		
平成14年度通常会計より	3,000,000		
利 息	1,664		
合 計	11,213,326		
支出の部			
な し			
差引残高	11,213,326円		

平成16年度 同窓会通常会計予算 (平成16年1月1日～平成16年12月31日)				
収入の部				
費 目	平成16年度予算	前年度予算	増 △減	備 考
前年度からの繰越金	553,466	592,626	△39,160	
入 会 金	3,000,000	3,000,000	0	
維持会費	6,000,000	6,000,000	0	
利 息	534	374	160	
雑 収 入	10,000	10,000	0	
合 計	9,564,000	9,603,000	△39,000	

支出の部				
費 目	平成16年度予算	前年度予算	増 △減	備 考
会 議 費	1,000,000	1,000,000	0	新年総会準備金ほか
祝 賀 費	800,000	800,000	0	
饗 別 費	300,000	300,000	0	
慶 弔 費	200,000	200,000	0	
通信印刷費	500,000	500,000	0	
旅 費	100,000	100,000	0	
会報発送費	2,000,000	2,000,000	0	
同窓会報費	1,000,000	1,000,000	0	
事 務 費	1,500,000	1,500,000	0	
同窓会長賞費	200,000	200,000	0	
補 助 費	600,000	600,000	0	翠雲体育会・図書館
環境整備費	500,000	500,000	0	指月底整備
雑 費	300,000	300,000	0	
予 備 費	564,000	603,000	△39,000	
合 計	9,564,000	9,603,000	△39,000	

特別会計積立

収入の部			支出の部	
費 目	金 額		な し	
前年度からの繰越金	11,213,326			
平成15年度通常会計より	2,000,000			
利 息	26,674			
合 計	13,240,000			

※なお、通常会計より、100万円を翠雲体育会へ寄付

第11回 高崎高校同窓会ゴルフ大会結果報告

順位	氏 名	OUT	IN	GROSS	HDCP	NET
優勝	田口 恵一 (74歳)	46	40	86	15.6	70.4
準優勝	堀井 勝成 (88歳)	45	39	84	13.2	70.8
第3位	梅沢 豊 (86歳)	45	45	90	19.2	70.8
第4位	清水 義典 (74歳)	44	46	90	19.2	70.8
第5位	石田 康利 (85歳)	39	44	83	12.0	71.0

今回特筆すべきは、今大会最高齢の42期の山口秀夫氏が第9位に入賞されたことでしょうか。一緒にラウンドした幹事第67期のメンバーは圧倒されてしまいました。また、来年の同窓会新年会の担当期であります74期の田口恵一氏が優勝して新年会に弾みをつけました。恒例のチャリティーにも皆様は快く応じて頂き、収益は各方面に寄贈させていただきました。(67期・仙田健一)

○維持会費の納入について
平成17年度の維持会費の納入をお願い致します。納入については、同封の振込取扱票(加入者名「群馬県立高崎高等学校同窓会」)をお使いください。詳細については振込取扱票の裏面に記載してありますので、よく御覧ください。

■編集後記
同窓の皆様は多大なる御協力をいただき、会報38号が発刊できました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。御多忙の中、貴重な原稿やお写真を寄せ下さいまして、まことにありがとうございました。(本部幹事会)

第103回 高崎同窓会新年総会のご案内

同窓生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。今回の新年総会は、私達74期が担当させていただきますこととなりました。心に残る新年総会になることを目標に、諸先輩のご指導、ご助言を仰ぎながら準備を進めております。懇親会も、楽しい会になるように企画の準備を進めておりますのでご期待ください。

期日 平成十七年一月二十二日(土)
時間 午後三時より
場所 高崎ビューホテル
会費 五千元
(当番期74期代表 秋山 賢治)